

ヴァイシャーリー疫病譚における傘蓋供養

松田祐子

(九州龍谷短期大学)

1 はじめに

ヴァイシャーリー疫病譚は、仏陀或いはその代理者アーナンダが偈頌や陀羅尼を唱えて疫病を鎮める話である。これに属する一群の資料については、すでに岡田真美子氏が過去の經典比定の研究史をまとめ、グループ分けを行っている⁽¹⁾。これらのうち王舎城にいた仏陀がヴァイシャーリーに向かういきさつから述べるテキストには、その道中の仏陀にたいする傘蓋(chatra)の供養のエピソードと、その因縁が語られている⁽²⁾。疫病譚全体は複数の要素から構成されているのだが、本年度学術大会の「仏教信仰の種々相」というテーマに沿って、本論では疫病の鎮静に向かう場面と傘蓋の供養を取り上げて論ずることにする。まずそれぞれの資料のあらましを紹介した上で考察することにする。

2 傘蓋供養を説くヴァイシャーリー疫病譚

2.1 Mahāvastu の Chatravastu (ChV)

Mahāvastu のヴァイシャーリー疫病譚は Chatravastu に含まれているが、Chatravastu の名は傘蓋供養に由来していると考えられ、いくつかの独立した要素から構成されていると思われる。

傘蓋の供養は、散文と韻文で重層的に語られている。散文によると、

Bimbisāra, ヴァイシャーリーの人々, ガンガーの龍を始めヤクシャや神々によってそれぞれ500の chatra が, Śakra, Mahābrahmā 及び3人の devaputra によってそれぞれ一つの chatra が差し掛けられた。⁽³⁾ 世尊は chatra の数だけ仏陀を化作したので, 彼等は自分の chatra のもとにこそ仏陀がいると思った。韻文の繰り返しは散文の内容と大体一致するが, 傘蓋の装飾的形容がより詳しく描写されている。繰り返しの前には, なぜ何千もの傘蓋が現れたのかとの問いがあり, 王権を引き合いに出す答で韻文の繰り返しが始まる。⁽⁴⁾

過去世: 物語としては他に比して最もシンプルであるが, 韻文で語られている。梵行が完全で, 怖れるものの何もないバラモンが,⁽⁵⁾ 苦しむ衆生を見て法輪を転じ, 再生を滅して般涅槃した。声聞たちはストゥーパを建て, さまざまに供養をした。この仏陀の父のバラモンも, 無垢の傘蓋をストゥーパに立てて息子を供養し没したが, 白い傘蓋の果報によって, 転輪聖王と神々の中に生まれ, そして最後の生を受け私となった。過去世を語った後, ストゥーパに旗と幡, 白い傘蓋を立て, 祭壇を作り, 手形をつけるべきであると説いている。⁽⁶⁾

過去世は, 突然名前の出してきた Vāgīśa に対して語られており, 本来疫病の文脈とは関係のない独立したものであった可能性がある。

2.2 Ratanasutta への注釈 (RSV)

パーリ語文献では, ヴァイシャーリー疫病譚は注釈にしかでてこない。その一つが疫病を鎮めるために唱えられたという Ratanasutta への注釈である。⁽⁷⁾ 往・復路での供養を描いている。

Vesālī への往路: Bimbisāra 王は世尊の道中を莊嚴してさまざまな供養をしながら, 世尊には二つの白い chatta を, 500人の比丘にはそれぞれ

一つの chatta をささせ Gaṅgā の岸辺まで道中を荘厳して同行した。Vesālī の人々はその倍の供養をして迎えた。

Vesālī からの帰路：世尊は Gaṅgā の龍王の住まいで供養を受ける。大地にいる神々は人々や龍たちが供養をするのを見て、いたるところで chatta 上に chatta を重ねて (chattāticchatta) 掲げた。このような方法で、Akaniṭṭhabrahmabhavana に至るまで、特別な供養を行った。Bimbisāra 王は戻ってくるときの Licchavi の倍の供養をして迎えた。

過去世：Takkasilā に Saṃkha と Susīma というバラモンの父子がいた。Susīma は Bārāṇasī に行くことを父に申し出て許され、父の友人のバラモン Asuka のもとで学問を修めることになった。12年かかる学問を数ヶ月で終え、師に「この学問の始めと中ほどは見えたが、終わりが見えない。」と言うと、師は「自分もそうだ。」と語った。そこで師の勧めで Isipatana にいる paccekabuddha たちに教えを請うと、「出家していない者には学べない」と言われて出家する。修行の後 paccekabuddha となったが、程なく涅槃した。paccekabuddha たちと大衆は彼の葬儀を行い、城門のところにストゥーパを建てた。Saṃkha は久しく息子の消息を聞かないので、息子に会いに Takkasilā から Bārāṇasī にやって来てその死を知った。父はストゥーパのところでさまざまな供養をした後、自分の chattaka を結わえて去った。Saṃkha が今の私であって、このときの供養のおかげで現在このような供養を受けていると語るが、⁽⁸⁾ 父親の転生には言及していない。最後に Dhammapada 290 の偈頌を引いている。

2.3 Dhammapadāthakathā Gaṅgārohanavatthu (GRV)

Gaṅgārohanavatthu は捨を称える偈頌への注釈であり、⁽⁹⁾ その名称はガ
ンガーを渡る際の供養からきていると考えられるが、それは往路よりも復

路のほうが、神々や特にナーガの供養の描写が細かく華やかである⁽¹⁰⁾。

往路：Bimbisāra 王は、500人の比丘を連れて Vesāli に向かう世尊の道中、さまざまなもので供養しながら、世尊に対しては chatta の上に chatta を重ね二つの chatta (chattādhichatta) を、それぞれの比丘には一つずつの白い chatta を差し掛けさせて、ガンガーの岸辺まで送った。Vesāli の人々はその倍の供養をして、世尊には四つの、比丘には二つずつの白い chatta を重ねて用意した⁽¹¹⁾。

復路：Licchavi 族の人たちは二倍の供養をして世尊を送った。ガンガーのナーガラージャたちによる宝船と白い傘蓋を供養され、ナーガの住まいに寄る。対岸では Bimbisāra 王が倍の供養を用意していた。

過去世：PSV と同様 Saṃkha と Susīma という Takkasilā のバラモン父子、Bārāṇasī の友人 Asuka など大筋は同じだが、文章は同じではない。

2.4 増一阿含経（増一）

阿闍世王、羅闍城中の各500宝蓋が如来の後に従い、釈提桓因、諸河神が虚空中に⁽¹²⁾、出迎えた毘舍離城人民が、各500の宝蓋を持つ。

過去世：蜜絺羅国の善化治王と日光夫人にやっと授かった王子愛念は、太子として楽しく暮らす、ある時無常を感じて出家し、辟支仏となる。両親を度すため虚空を飛んで城に戻り、父の申し出に従い園中に住み供養を受ける。その涅槃後、父王が舍利を取って神寺を建てるが、後日それが壊れているのを見て、一蓋を以て覆った。この徳によって父王は数百千変、転輪聖王あるいは帝釈梵天となり、今の私となった。もし成道していなければ、さらに二千五百転変して転輪聖王となったはずだから、今これらの宝蓋が現れた⁽¹³⁾。

2.5 除恐災患經（除恐）

阿闍世王，維耶離國王，大海龍王，恒水諸龍王，天帝釋諸天が，各500の七宝蓋を差し出す。仏はその施を受け，一蓋を受けなかった。

過去世：轉輪聖王摩調（大天）の千子のうちの末子が父の七宝蓋を見て，自分はいつそれを使えるのかと母に尋ねた。千子のうちの末子なので王になれる前に死んでしまうと言われると，出家をした。緣覚道を成した後空を飛んで母のもとに行き，その供養を受け園内で亡くなった。母は塔を建てて供養をしていたが，或る時王が来てその塔について問うた。王は事情を知り，一蓋をもって塔の上を覆った。さらに太子を立てて王位を譲り，自らは出家し，寿命が尽きると梵天として生まれた。この一蓋の徳によって，その後無数の轉輪王，天王となって無限の福を受けたが，余福によって2500返，轉輪王となるはずだったからこの供養を受けている。一蓋を受けなかったのは，この一世轉輪王の福を後世の弟子たちに施すためである⁽¹⁾。

2.6 菩薩本行經（本行）

摩竭王，毘舍離王と臣民，四天王一化応声天王，第七梵天王一首陀会天，阿修倫，龍が各500の宝蓋を世尊に奉上。合わせて3000のうち，一つを留めて後の諸弟子のために供養させ，残りを受ける。

過去世：轉輪聖王修陀梨鄯寧には千人の王子がいた。王が出かけるたびに頭上に大宝蓋があったので，末の王子は母に「これは誰で，自分もこうなれるか」と尋ねた。母は「これは修陀梨鄯寧大轉輪聖王で，おまえの父である。おまえは千子のうち最小であるから，王にはなれない」と言った。それでその王子は出家し，辟支仏となった後，母のもとに戻って神通を示し，その供養を受けた。数年後涅槃すると，母は塔を建て供養した。或る時父王が園を訪れ，この塔について訊ね，末の息子が轉輪聖王の宝蓋に憧

れたが、それが適わぬと知って出家し、涅槃したと知る。王はこれを悲しみ、冠・払子・衣服とともに大七宝蓋で塔の上を覆って供養した⁽¹⁵⁾。この功德によって無央数劫転輪王となって、常に三千七宝蓋があり、無央数劫、天帝或いは梵王となった。辟支仏の塔に対する供養の果がこれであるから、如来の色身・塔・形像に対する供養の功德は計り知れない。

2.7 根本有部律薬事（薬事）

サンスクリット版ではヴァイシャーリー疫病譚の部分が欠落している⁽¹⁶⁾。

未生怨王、栗姑毘等、諸龍王等、四天王衆、三十三天が、各500の傘蓋で供養。世尊は神力で、諸天人に自分の持つ傘蓋が世尊の頂上にあると思わせた。

過去世：転輪王大善現の999人の子は必ず王に付き従っていた。そこで諸夫人はもし懐妊するものがいても、王には告げまいと約束したので、一夫人が男子（頭が傘蓋に似る）を産むと、諸夫人に可愛がられた。後にその子が遠くから父の威容を見て、母等に質問する。それが父と聞かされ、後を継げるかと問うと、千子の末子であるから不可能と教えられ、出家した。独覚となった後、諸母のもとで神通を示し、やがて涅槃すると、諸母は塔を建てて供養した。後に王は夫人たちと園内を詣でたとき、このいきさつを知り、我が子を惜しみ、冠や傘蓋などを塔の上に置いた。この福業によってすでに2500の転輪王位を得、今天人が2500の傘蓋を頂上で持っている。もし殊勝の果を得なかったなら、さらに2500の転輪王位を得ていた。わたしの福業の異熟を皆諸声聞に回向して施す⁽¹⁷⁾。

2.8 Mahāsāhasrapramardanī（守護大千国土經）(MSP)

梵・藏・漢が揃うが、最も新しい。全体の分量のほとんどは護法として

の偈頌と陀羅尼であり、ヴァイシャーリーの疫病譚は骨組みとして使われているにすぎず、物語としての肉付きは薄い⁽¹⁹⁾が、簡潔な傘蓋の供養はある。

Brahmā が右から、Śakra が左から、四大王がひとりひとり後ろから、それぞれ500の傘蓋を、Maheśvara devaputra, 28の mahāyakṣasena-pati, 32の mahāyakṣanagna, 子供とお供を連れた Hārīti が、声聞ひとり⁽¹⁹⁾に一つずつ傘蓋を差し掛けた。ここでは他の文献のように人間による華やかな供養としては描かれていない。

(過去世)：なし。

3 各資料の比較

(枠組)：マガダの王をビンピサーラとする ChV 及びパーリの注釈 RSV, GRV (Bグループ) と、アジャータシャトルとする残りのもの (Aグループ) の二つに分けられる。

(現世の供養)：500という数字と傘蓋という語がすべてに共通に有り、MSPを除くと、基本的に送る側のマガダ王と迎える側のヴァイシャーリーの人々による供養である。とくにパーリの注釈ではビンピサーラ王とリッチャヴィ族が競うように供養をし、復路にさらに華やかな供養をする様子を述べる。供養した傘蓋はパーリの注釈では白、ChVでは散文部で単に chatra と言ひ、韻文ではさまざまに形容している。Aグループでは薬事が百輻の傘蓋、その他は宝蓋とある。

(過去の因縁譚の共通点)：入滅した息子の塔に、父親がひとつの傘蓋を差し掛けて供養するという点と、父親が仏陀の過去世という点ですべて共通する。息子はChVでは仏陀に、それ以外はプラティエーカブッダになる。仏塔供養の功德を説くことが最大の目的である。

(父親と息子)：Bグループではバラモンであるが、ChVが韻文で語り、

固有名詞を出さず筋書きは簡潔なのに対し、パーリの注釈では登場人物に名前がついており、物語が具体的に膨らんでいる。パーリの二つの注釈は内容的にはほぼ似ているが、言葉遣いが異なっている部分も多く、同一とは言いがたい。Aグループでは増一が若干設定を異にする。父は王であるが、増一では単に王であり、その他では転輪聖王である。また息子の数及び出家の動機も、増一は独り息子で世の無常を感じたのに対し、その他は千人息子の末子が転輪聖王の傘蓋に憧れるが転輪聖王になれないと知って出家する。

(塔を作った者)：彼の声聞たちたち。パーリの注釈では独覚たちと大衆。Aグループでは増一は父王、その他は母。

(父の供養した傘蓋)：Aグループでは現世で供養されている傘蓋と同じである。ChVでは無垢(vimala)のといい、また白の傘蓋を塔にかかげるべきと述べる。パーリの注釈では小傘蓋(chattaka)である。

(息子の塔への父の供養の果報)：パーリの注釈は塔に対して行った過去の一つ一つの具体的供養を現在の供養に対応させて、喜捨の大切さを説くだけで特に転輪聖王や王権に言及していない。Bグループでは、父親の転輪聖王への転生と、仏陀が悟り得なかった場合、さらに転輪聖王へ転生していた可能性を述べる。ChVは、バラモンの父親の転輪聖王への転生を述べ、śvetachatraの功德を説いて、パーリの注釈とAグループの両方の要素を備えている。

4 傘蓋供養と疫病鎮め

ヴァイシャーリーの疫病譚は、パーリでは経典のカテゴリー中には存在しない。また、薬事以外には他の部派の律には対応がない。それゆえ古い段階から仏典の中に存在した物語とは言い難いであろう。また一方、

Dvāvimśatyavadānakathā 中の Ujjvālikakathā⁽²⁰⁾ や『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼經』(大正 No.5043) のように傘蓋供養を説かないものもあるから⁽²¹⁾、この供養ももともと疫病譚とつながっていたわけではないと思われる。しかし MSP 以外の傘蓋供養には共通して、息子の塔を供養する父親の過去譚が語られており、仏塔崇拜の功德を説く因縁譚は独自に存在していたと考えられる。GRV を見ても分かるように、この話は捨の偈頌の注釈であり、本来病気の話と言うよりは供養の方に重点があったはずである。

さらに ChV では明らかであるが、傘蓋の供養を受けた仏陀が境界に足を踏み入れるだけで病気の原因の魔物たちが逃げたことと、偈頌を唱えることが併置してある⁽²²⁾。パーリの注釈でも供養を受けた仏陀が到着した途端、魔物たちが逃げ、さらに仏陀の命を受けたアーナンダが Ratanasutta を唱えて城内を巡行して、残りの魔物が逃げたという二重構造になっている。

ヴァイシャーリーの疫病譚は、偈頌や陀羅尼を唱えることで疫病を鎮めることを是認する物語とみなすことができ、それらは一通りではない⁽²³⁾。ではなぜ傘蓋の供養と結びついた物語群があるのだろうか。上でも触れたように、ヴァイシャーリーに関連した供養と疫病という別々の物語であったものがまとめられ、さらに傘蓋の供養には仏塔供養の因縁譚が結びついていた。この仏塔への傘蓋供養の果報を説く物語が、とくに A グループでは転論聖王・王権と強く結びつけられている。増一は、一人息子が無常を感じて出家するという設定だが、その他は千人の息子をもつ転論聖王とその傘蓋に憧れる末子という設定で、意気盛んな王が傘蓋をかざしながら勇ましく巡行する姿を連想させる。そうすることによって、供養に重点のあった傘蓋が王権の象徴として、病気を鎮めに向かう仏陀の姿を転論聖王にだぶらせ、力強いイメージを抱かせる効果を持ったのではないかと思われる⁽²⁴⁾。そのようなイメージの定着によって、MPS のような後代の、護呪中

心で物語的要素が薄い経典でも潜在的効果をもち、人間による供養と因縁譚をはなれた、神々と鬼神による簡潔な傘蓋供養の記述として残ったのではないかと思われる。

《参考文献》

- 岡田真美子 「梵文薬事欠損箇所の部分補填——ヴァイシャーリー疫病伝説——」『インド学仏教学論集—高崎直道博士還暦記念論集—』東京春秋社 1987: pp. 754-786.
- 杉本卓洲 『インド仏塔の研究』京都 平楽寺書店 1984.
- Iwamoto Yutaka *Pañcarakṣā I, Mahāsāhasrapramardanī*. Beitrage zur Indologie, Heft 1. Kyoto, 1937.
- Jones, J. J. The *Mahāvastu*. vol.1, London: PTS, 1949, rep. 1987.
- Matsuda Yuko. A stanza in the Vaiśali Plague Story. *Zinbun* 2000 No.35, Kyoto, 2002.
- Okada Mamiko *Dvāviṃśatyavadānakathā: Ein mittelalterlicher buddhistischer Text zur Spendenfrommigkeit, nach zweiundzwanzig nepalischen Handschriften kritisch herausgegeben*. Indica et Tibetica 24, Bonn, 1993.
- Senart, E. Le *Mahāvastu*. vol. I, Paris, 1882~1897.
- Skilling, Peter. *Mahāsūtra*. I, II. Oxford: PTS, 1994, 1997.

注

- (1) 岡田1987。岡田氏は根本有部律薬事の梵本欠損部分とĀryavaiśālīpraveśa, Mahārakṣāmantrānusāriṇīの同定を行ったが、残念なことにSkillingはこの日本語で書かれた研究を知らず、これらのテキストを校訂し対比研究している。一方、岡田氏は岩本裕氏の校訂したPañcarakṣaの中の他のテキストに言及しているにも関わらず、同じく同氏が校訂し、Skillingもこの疫病譚のひとつに加えているMahāsahasrapramardanī(守護大千国土經)を見落としている。なお岡田氏が未見としているセイロン版Manorathapūrānīは、筆者も未見である。
- (2) これらのうち仏陀が自らの力で事情を察知するMSPを除いては、仏陀招聘を要請するヴァイシャーリーからの使者とマガダの王とのやり取りがある。またMPSには因縁はない。

- (3) ナーガ以下, ガンガーを渡る仏陀に対する供養として描かれている。
- (4) ChV pp.264-265: 名門の出で, 日々の業をきちんと行う大地の王たちは, (傘蓋に) ふさわしい。そしてこの傑出した, 男の中の雄牛も傘蓋にふさわしい。外で敵の群れを打ち破り, 征服されない王権を享受する, (…) を備えた人々も, 傘蓋に値する。どうしてあらゆる点であらゆる煩惱を残りなく打ち倒し, (魔)ナムチも打ち倒した世尊が幾百千の傘蓋に値しないだろうか。
- (5) ChV 267.13: *brāhmaṇo akutobhayo. akutobhayo* を名前と解釈できなくもないが, すぐ後に *tasya stūpam akarensu śrāvakā akutobhayā* と同じ言葉は形容詞として使っている。Jones は形容詞として訳している。
- (6) Senart, vol.1, ChV pp.263ff.; ChV p.269.13-14: *tasmā dhvajapatākām ca śvetacchatraṃ ca kārayet // vedikām caiva stūpeṣu kuryāt pañcāṃgulāni ca /*
- (7) Paramatthajotikā vol. 1, pp.162ff. Ratanasutta は Khuddakapāṭha と Suttanipāta に含まれる。Cūlavamsa (chap.37, vv.189-198)は Upatissa I の治世に飢饉と疫病が起こったとき Gaṅgārohaṇasutta の起源を聞いて, 仏陀の身骨の金色の形を作り, 水を入れた師の石の鉢を手のくぼみに据えて大車に乗せ, 僧たちがそれを囲んで Ratanasutta を唱えながら街をめぐったところ, 夜明けに雨が降って, 病人も回復して祭りを行ったので, 今後飢饉疫病のときには同様にすると命じたとある。Skilling (1997, pp. 609-610) はこの箇所から遅くとも 4 世紀までには, スリランカでヴァイシャーリー疫病譚の粹物語は知られており, それにならったパリータ儀式が行われていたと述べている。さて 4 世紀末から 5 世紀にかけてインドを往復した法頭は, 往路于闐国で, 七宝で飾り幡蓋を掛けた仏像を車に乗せて巡行する行像を見, また復路滞在した獅子国 (スリランカ) では, 仏歯の巡行を報告している (大正51, 857b, 862c, 865a-b)。法頭の報告は疫病とは関連しないが, 4 世紀末には北伝・南伝の両経路で仏像や遺骸の一部を飾り立てた山車に乗せて巡行する祭りが存在していたことになる。これらに見える巡行の準備は, パリーの注釈における仏陀のマガダとヴァイシャーリーの往復の際の供養や, アーナンダが仏陀に代わってヴァイシャーリー城中を巡行した記述を連想させる。パリーの注釈は現実を反映しているのかもしれない。
- (8) ストーパーに対する一つ一つの供養 (手のひらで地面をならす, 花を飾る, 傘蓋を掛ける等) を現世で受けている供養それぞれに対比している。
- (9) Vol. III 439-441. Dhammapada 290: *mattāsukhapariccāgā passe ce vipulaṃ sukhaṃ / caje mattāsukhaṃ dhīro sampassaṃ vipulaṃ sukhaṃ //* に対する注釈。

- (10) GRV pp.442-444.
- (11) Vesālī での滞在日数が RSV と異なる。
- (12) 諸河神とあるが、河を渡る記述はない。
- (13) 大正 2, 726c-727b.
- (14) 大正17, 553a-555a.
- (15) 大正 3, 117a-118c.
- (16) 病気鎮静の偈頌と陀羅尼を唱える部分が Mahā(rakṣā)mantrānusārī に
よって復元できることは、岡田氏によって指摘されているが、傘蓋供養はそ
こには含まれていない。
- (17) 大正23, 22c-23c；北京 'Dul-ba Khe 23b7-26b1.
- (18) 仏陀は天眼で事情を知るので、ヴァイシャーリーからの使節の話も、ガン
ガーを渡る記述もなく、グリドゥラクタータとヴァイシャーリーの距離感がま
ったくない。
- (19) Iwamoto pp.21-22；北京 No.177, Rgyud Pha 75a6~75b3；大正19, 585c-
586a。漢訳は宝蓋。宝鉢も加える。
- (20) Okada 1992. 仏陀に命じられてアーナンダがヴァイシャーリーまで出向
く。
- (21) 異訳とされる大正 No.1044, 1045では冒頭のヴァイシャーリー疫病譚の枠
組は存在しない。
- (22) Ratanasutta のバラレルが唱えられているが、結果は明記されていない。
- (23) 拙稿 2002参照。疫病を鎮める際に唱えられる偈頌について、共通に現れ
るひとつの偈頌を中心に考察した。
- (24) 時代は下るが9世紀頃のものとしてされる Agnipurāna 269 chatrādīmantra
では、傘蓋に対して「雨雲が幸いのためにこの大地を覆うように、勝利・無
病・繁栄のために王を覆え。」と呼びかけている。ここでは白い傘蓋がイメ
ージされている。